

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

第 69 号

無料

特集

スポーツの未来のためにⅡ
新大関・安青錦インタビュー

Явгусішин Данило

スポーツくじ



スポーツ振興くじ助成事業

Sport
Godzilla®

スポーツゴジラ®

〔第69号〕

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2 | 第69号を発刊するにあたり

長田 渚左

■特集■

「スポーツの未来のためにII 新大関・安青錦インタビュー」

4 | もっと大きな夢へ——ウクライナ出身 初の大関・安青錦 取材・構成 長田 渚左

13 | 語り継がれる箱根駅伝 取材・構成
昭和18年——戦時下を走った男たち 鎌田 みわ子

21 | 監督が怒ってはいけない大会——11年目の手応え 構成 首藤 正徳
写真 山内 亮治

連載 戦争とスポーツ
30 | スポーツで戦争を早く終わらせるために 取材・構成
——富田正一氏が世界的な視野で語る 長田 渚左

38 | 『走』第16回
日本のスポーツは「とにかく走る」ことが基本!? 玉木 正之

39 | 夢劇場『馬』No.41「風穴」 長田 渚左

40 | バックナンバーのご案内

表紙・南 伸坊

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>
バックナンバー第20、40～65号はホームページからもお読みいただけます。

『スポーツゴジラ』は、ジャンルを問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第69号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



2025年の晩秋に嬉しい出来事が二つあった。

一つはウクライナ出身力士で大相撲のスピード出世記録を更新し続ける安青錦関が、九州場所で初優勝して史上最速で新大関に昇進したことだ。力士としては小柄な体ながら、小細工をしない、低い姿勢からの真つ向勝負が何とも心地よかった。

昨年10月、スポーツゴジラ69号にインタビューを掲載したいと思い日本相撲協会に取材を申し込んだ。ウクライナとロシアの戦争に関する政治的な話題には触れず、相撲に関するこのみという条件で受理された。

安治川親方にも了承をいただき、ロンドン公演の帰国翌日という慌ただしい中、ご本人への取材が叶った。そこで彼が本当に相撲が大好きで、日本文化

に懸命に溶け込み、相撲道に真つすぐに邁進しているかが胸にグツと伝わってきた。今、彼の活躍は戦禍の祖国で希望の光になっている。世界の架け橋となるような力士になつてほしいと心から願っている。

二つ目は日本スポーツ学会で『超人スポーツ 身体テクノロジーの社会変革』というテーマで講演された東京大学先端科学技術研究センター副所長の稲見昌彦氏が『第9回 羽倉賞 フォーラムエイト賞』を受賞したことだ。

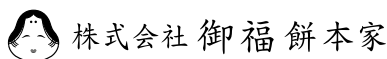
本誌69号で講演再録を掲載した縁もあり、私たちに推薦させていただいた。羽倉賞は最先端表現技術利用推進協会が、3D立体映像やVRなどの表現技術の質を高める作品や取り組みを、年に一度選考して表彰している。スポーツの未来の光となる稲見氏の研究が、社会に高く評価されたことは私たちの活動にも大きな光になった。

新年にスポーツゴジラ69号とともに、66号も再度お目通しいただけると幸いです。

ご協賛およびご協力企業・団体



WOWOW



人と社会を支える力



国士舘大学

文藝春秋

上月財団



MS&AD



三井住友海上

JAPAN SPORT
COUNCIL



JWCPE 日本女子体育大学



(順不同)

特集 スポーツの未来のためにⅡ

もつと大きな夢へ

——ウクライナ出身
初の大関・安青錦

取材・構成 長岡裕生

ウクライナ出身力士の安青錦の快進撃が止まらない。昨年11月の大相撲九州場所で初優勝を飾り、史上最速の所要14場所で大関に昇進した。場所前の同10月、安治川部屋で本人、安治川親方、おかみさんの絵莉さん取材。スピード出世記録を次々と更新する21歳の素顔に迫った。



2025年11月28日の大相撲九州場所千秋楽の優勝決定戦で、豊昇龍(左)を送り投げて破り、初優勝を決めた安青錦(福岡国際センター)

安青錦新大(あおにしき・あらた) 本名ヤブグシシ・ダニーロ。2004年3月23日、ウクライナ生まれ。7歳から相撲を始め、19年世界ジュニア選手権3位。レスリングも経験し、国内大会110kg級優勝。22年2月にロシアによるウクライナ侵攻が始まり、同年4月に来日。関西大などで練習し、同年12月に安治川部屋の研修生となる。23年秋場所初土俵。24年九州場所新十両、25年春場所新入幕。同年九州場所で大関に昇進し、12勝3敗で初優勝。場所後に年6場所制となった1958年以降では史上最速(付け出し除く)の初土俵から所要14場所での新大関昇進が決まった。三賞は敢闘賞2回、技能賞3回、殊勲賞1回。182cm、140kg。

◆安治川部屋 2019(令和1)年7月場所で引退した伊勢ヶ濱部屋の元関脇・安美錦(本名・杉野森竜児)が、年寄り安治川を襲名し、22年12月に伊勢ヶ濱部屋から独立して新設扱いで安治川部屋を再興。仮住まいをへて、23年6月に東京都江東区石島で部屋開きを行い、おかみさんの絵莉さんと二人三脚で部屋を運営している。安治川親方は現役時代に多彩な取り口で「上位キラー」として活躍。貴乃花をはじめ対戦した5横綱全員から金星を奪うなど、獲得金星8つ。殊勲賞4回、敢闘賞2回、技能賞6回。関取在位(幕内・十両)117場所は元大関魁皇と並び歴代1位。

——ウクライナ中部のヴィンニツァ市の出身です。

相撲に興味を持ったのは7歳の時だったそうですね。

安青錦 スポーツクラブで柔道を習っていて、稽古

が終わって先輩たちが相撲を取り始めたんです。ルールが簡単で誰が見ても分かる。手をついたら負け、土俵から出ちゃっても負け、すぐに勝負がつく。初めて見て面白いなと思いました。その後、スポーツクラブでレスリングも習うようになりました。

——つまり将来的な選択肢として柔道、相撲、レスリングの3つの競技があったんですね。

安青錦 レスリングでオリンピックに出たいという思いも、チャットと一瞬だけあったのですが、次第に心の中で相撲が一番になっていきました。

——知らなかったのですが、ウクライナはアマチュア相撲がとても盛んで、スポーツ省の推進スポーツ種目だそうですね。

安青錦 女子も強くて、世界大会やワールドゲームズにも出ています。でも盛んではありませんが、相撲

だけをやっている人はそんなにいません。

安青錦新大（本名・ヤブグシシン・ダニール）は15歳の時に大阪府堺市で開催されたアマチュア相撲の世界ジュニア選手権にウクライナの中量級代表として出場した。出場資格は18歳以下だったので、中学生が高校生に挑むようなものだったが、見事3位に入賞した。この大会で思いがけない出会いがあった。観客席で観戦していた関西大学相撲部1年生（当時）の山中^{あらた}新大さんが「強いねえ」と声をかけてきたのだ。そこで連絡先を交換し、7000kmも離れたウクライナに帰国してからもインスタグラムでコミュニケーションを取り合うようになった。そこでダニール少年はユーチューブで見た2002年秋場所11日目の横綱貴乃花と大関朝青龍の一番の感動を何度も語り、将来は自分も日本に渡って力士になりたいと夢を伝えたという。

そんな中、2022年2月、ロシアがウクライナ

へ軍事侵攻を開始した。平穏な日常が脅かされる非常事態に、ダニーロ少年は両親とともにドイツのデュッセルドルフ市に避難。そこから山中さんに「日本に避難できませんか」と連絡をした。一日でも早く相撲を取れる生活に戻りたい一心だった。山中さんは両親に相談して受け入れ態勢を整えた。

戦時下のウクライナでは18歳以上の男性は出国が原則認められない。17歳のダニーロ少年は『力士になる』という夢のために単身で日本に渡った。

2人は2年半ぶりに再会を果たす。山中さんはダニーロ少年を自宅に居候させて、大学の相撲部と一緒に稽古できるように許可を取った。それから約8カ月間、関西大学や山中さんの出身校の報徳学園高校でも稽古を続けて、ダニーロ少年の角界入りを後押しした。もしこれが20年前だったら、ウクライナにいる少年が自身が生まれる2年前の貴乃花対朝青龍の一番を映像で見て感動したり、日本の大学生とSNSを通じて交流することなどできなかっただろ

う。当然、日本で角界入りするという発想も浮かばなかったのではないか。

——テクノロジーの発達と電子機器の普及により、ウクライナの若者が日本伝統の大相撲と結びつく。今の時代ならではのエピソードですね。

安青錦 うーん。面白いです。ご縁を感じます。もし自分と山中さんが逆だったら自分はNOと言ったのではないかと感じます。

——ご縁ですか。そのご縁を感じるのは山中さんとはですか？ それとも相撲界ですか？

安青錦 ……どちらもです。

——ご自身が初めて見て感動したという貴乃花対朝青龍の一番は何回くらい見られたのですか？

安青錦 数えたことないです。数えられないくらい……。いつ見ても感動します。

——あの映像は角界に入るきっかけとして、なくてはならないものだったのですね。

安青錦（日本で）相撲を取りたいという強い気持ちになりました。

——安青錦関の立ち合いは上体が起きず、低く低く攻める。見事な取り口です。それは柔道よりもレスリングの影響でしょうか。

安青錦 柔道は真つすぐの上体での対戦です。レスリングは上体を曲げて、ずつと曲げたままですから、レスリングの影響があると思います。親方にも「低く」と言われています。

——相撲の魅力は勝負がすぐに決まるところと言われました。相撲を知らない人に魅力をどう説明しますか。

安青錦 まず（誰でも）見れば分かると思いますから、見てほしい。真剣な体と体のぶつかり合い。自分たちは気持ちのぶつかり合いが魅力です。小さい力士が大きい力士を倒すのも魅力です。

——モンゴル勢をはじめ海外から日本にきて力士になった人たちは日本語がとてもしやすいのですが、

安青錦関は群を抜いて上手いです。ボキャブラリーも豊富でイントネーションも違和感がありません。どうやって習得されたのですか。

安青錦 ありがとうございます。親方の言っていることが分からないと相撲の道が遅くなってしまう。みんなとわいわい話をするのが好きですし、分からないときは聞いて、新しい言葉は何度も書いて、3回ぐらい使ってみる。自分は（誰かに）聞くことは恥ずかしいので、大丈夫です。ジョークが分かるようになるのだいたい良いのかなと思っています（笑顔）。

——日本語を覚えるのも早いのですが、何より昇進の早さが際立っています。23年秋場所で初土俵を踏み、同年九州場所から序ノ口、序二段と2場所連続優勝。24年春場所で三段目優勝は逃したものの、プロ初黒星を喫するまで20連勝。3場所連続6勝1敗の好成績で番付を駆け上がり、20歳7カ月で新十両昇進。十両を2場所で通過して、初土俵から所要9

場所で新入幕。そして史上最速の初土俵から13場所
で関脇に昇進しました。目がくらむような出世スピ
ードです。挫折もなく、次々と夢を実現しているよ
うに思います。

安青錦 まだまだ。小さい夢ではなく、大きな夢に
向かってゆきます。

—— 異例のスピード出世が注目されていますが、入
門してから壁はなかったのですか。

安青錦 壁はありません。壁は自分自身でつくるも
のです。負けてもまた稽古して次に向かえばいい。
スピード出世は友達がとても喜んでくれるので嬉し
いです。

—— では番付が上位に上がっても、しっかりと地に
足がついているということですね。

安青錦 はい。地に足がついていないと（相撲は）
負けます（笑い）。

—— 土俵で戦っている時は大きく見えますが、実際
は身長182cm、体重140kgです。幕内平均の1

84・6cm、157・1kgより小さいです。さらに
上を目指す上で、もつと体を大きくしたいですか。
安青錦 そこが一番難しいです。少しずつ大きくし
てゆくのが大変です。

—— ここまでの相撲人生は順調そのものに見えま
すが、不安があるとしたら何ですか。

安青錦 この場で言うわけじゃないですが（笑
い）。不安はいっぱいです。人間ですから。

—— 頭の中が相撲でいっぱいですね。あえて聞きま
す。相撲は面白いのですか。

安青錦 それはもう、ずつとずつと相撲は面白いで
す。これからも頑張ります。

—— 10月のロンドン公演では、会場のロイヤル・ア
ルバート・ホールが5日間満員の観客で埋まりまし
た。大相撲は今や世界でも大人気です。安青錦関に
はウクライナはもとより世界の架け橋となるような
力士になつてほしいと思っています。

安青錦 はい、頑張つてゆきます。応援して下さい。

安治川親方にきく

——もともとはダニール・ヤブグシンさんを安治川部屋に受け入れるつもりはなかったそうですね。

安治川 勧めてくれる人がいたのですが、初めは会うだけのつもりでした。真つすぐな眼をしていたのが印象的で、すぐく相撲が好きだというのが伝わってきました。別に体も大きくなかったし、強くなるかとか、関取になれるかとかは考えませんでした。ただ彼が日本や相撲を学びたいというのはよく分かりました。だからうちに来てはどうかということになりました。



——立ち合いから低い姿勢での相撲が印象的です。

背中ので広背筋が特別強いとも言われていますが。

安治川 もともと強いとかではなく、鍛えて強くなってきた。本人の努力です。体が小

さいので戦える体勢を自分で見つけていったということです。こちら「上体を低く」とは言いますが、他の力士にも同じように言っているわけで、本人がやるか、やらないかです。

——相撲の稽古で「股割り」（両脚を大きく開いて座り、上半身を前に倒して股関節の柔軟性を高める柔軟運動）があります。力士は股割りが必然だと思っていました。安青錦関は苦手だと言っています。

安治川 体が硬いことを感じさせない自分に合った体の使い方をしていると思います。無理な体勢で無理に柔らかくすることで、かえってケガのリスクが増すこともあります。無理にそっち（股割り）に時間をかけるより、もともと持っているものを意識して、相手に最大の力を伝える方法を考えればいいと思います。

——親方も体が硬かったのですか。

安治川 私は柔らかかったのですが硬い人のことはよく分らないけれど、力士それぞれ力が出せるところ

を見つけて「あーしろ、こーしろ」と言います。

——親方は現役引退後に早稲田大学大学院で学び、スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻トップマネジメントコースで「相撲部屋におけるおかみさんの役割について」という修士論文を書かれました。なかなか特殊なテーマです。どういった背景があったのですか。

安治川 まだ部屋を持つ前でしたが、自分にしかできないテーマにしようと思って試みました。相撲部屋のおかみさんは協会員ではないので給料はないのですが、部屋にとって欠くべからざる存在です。これからの時代におかみさんのなり手がなくなつては困ると思ったので、今までのおかみさんとこれらのおかみさんを取材・研究して書きました。

——大学院行つてどんな点が良かったのですか。

安治川 いろいろな人の意見を聞いたことで、指導法や考え方を一人一人に合ったものに広げられたことです。一つ「これだ!」と思つても、それだけに

固執してこだわるのではなく、この力士にとって同時に本当にこれでいいのか? という疑問を3つ、4つ考えるようになったことです。

——安青錦関のスピード出世についてはどう感じていますか。

安治川 史上1位のスピードで昇進するとは思っていなかったですが、教えたことをじっくりとやってきているので、急激にある日突然強くなったわけじゃない。見ている側としては特に驚いてはいないです。まだ21歳。大学生ぐらいの年齢なので、休ませるときは休ませて、疲労をしつかり取つてまた稽古に励ませるようにしています。これからさらに上を目指していくことに変わりないです。

——前例のないスピードで昇進する安青錦関に親方として日頃から声をかけていることはありますか。

安治川 大丈夫、大丈夫としか言わないです。賢いので考え過ぎて不安になるので、いつも大丈夫だ……と繰り返し言っています。

おかみさんにきく

——安治川部屋のおかみさんになられる前から相撲がお好きだったのですか。

おかみ 小学生の頃は帰宅してNHKの相撲を見たり、たまに観戦に出かけることもありましたが、まさか関取と結婚して、部屋のおかみになるとは夢にも思いませんでした（笑い）。

——ウクライナ出身のダニールさんが入門されて、コミュニケーションに苦労はありませんでしたか。

おかみ 初めから意思の疎通は問題ないくらい日本語ができたのですが、部屋で生活するようになってさらにぐんぐん上達しました。彼は耳がいいと思いますね。相撲のためにも言葉が分かるようになってい



い、日本語が上手になりたいというハングリーさも素晴らしいです。コミュニケーションで困ったことはないですね。

——安治川部屋の後援会とともに一般社団法人「相撲振興普及会」を設立されました。どのような背景があつたのでしょうか。

おかみ 後援会の方のお勧めがあつて、フェアで透明性のあるものを持つていた方がいいのではないかと、ということで安治川部屋の運営と両輪になっています。

——子どもたちにもっと相撲の魅力を届けたいということですか。

おかみ はい。ちびっこ相撲などで幼年期や小学生の時に相撲に親しんでいても、中学生になるとさまざまなスポーツの選択肢が増える影響で相撲をやめたり、また全国中学校体育大会で競技が廃止になったという残念なこともありしたので、普及には力を入れようと思っています。

——昔は学校に土俵や砂場があつて、子どもたちが気軽に相撲を取れる環境がありました。

おかみ 最近は土俵も減っていますから何とか普及

したいという気持ちで、今、山梨県の小淵沢に土俵をつくっています。後援会の方々の力を借りながら、何とか相撲を子どもだけではなく、大人にも楽しんでもほしいと考えています。

—— そうですね安治川部屋のウェブサイトには英語版もありますね。

おかみ おかげさまで部屋を訪れる外国人のお客様は多いです。見学だけでなく体験もしていただけます。靴と靴下を脱いで、四股^{しこ}を踏むくらいですが、インターラクティブ（一方的でなく、相互に）な方が楽しいと思います。いい経験にもなるかなと考えています。

—— へーっ、それは喜ばれますね。外国人にとってほだしで土を踏む体験は珍しく、貴重ですね。文化も異なるのでいろんな質問をされるのでしょうかね。

おかみ 外国の方はいろいろな興味を持たれるので、親方とともにしっかりと答ええています。ほかにもご依頼があれば老人ホームにも力士を連れて行き、

相撲の体操をご指導させていただいております。

—— ところで親方は早稲田大学大学院で学ばれ、おかみさんも早稲田大学のご出身ということもあり、昨年7月には「稲門相撲會^{とうもんすもうかい}」を設立。親方が会長、おかみさんが副会長を務められています。「稲門會」は早稲田大学卒業生による団体で体育各部やゼミなど1300以上もあります。早稲田大学相撲部との交流も強化普及につながりそうですね。

おかみ そうです。お互いの交流が良い刺激になったら嬉しいですし、少しでも早稲田にご恩返しができたら良いとも考えています。稲門相撲會をきっかけに相撲部や相撲そのものを応援してくれれば嬉しいですし、アメリカンフットボールやラグビー出身でコンタクトスポーツを続けたいと考えている人が入門してくれたらとも考えます。また、相撲のタニマチの方々とお会いすることで、セカンドキャリアにとっても多くのヒントを得られると良いなと考えています。

特集 スポーツの 未来のためにⅡ

語り継がれる箱根駅伝

昭和18年 ——戦時下を走った男たち

取材・構成 鎌田みわ子



優勝盾の「2603」は紀元二千六百三年。日本は第二次世界大戦の真つ只中にあった。この年に行われた箱根駅伝は軍部に戦意高揚に利用されたものとみなされ、戦後長く「幻の駅伝」として封印された。

昭和18年「幻の駅伝」は戦後しばらくして「箱根駅伝第22回大会」として正式に認められた。優勝盾に記された「KORR」関東学連のマークなどが決め手だった。

日本大学に保管されている
第22回優勝盾

鎌田みわ子 (かまた・みわこ) 1953 (昭和28) 年6月20日生まれ。第1回日本スポーツ学会大賞を受賞した坂田信久氏に声をかけられ日本テレビ箱根駅伝中継に15年携わり、箱根駅伝のエピソードの掘り起こしを行った。それが縁で世界陸上1987年ローマ大会、1991年東京大会にも参加した。

心新たに迎える正月に人々が熱狂する箱根駅伝。関東の、それもアマチュアの大学生によるレースが今や新年の国民的行事となつている。その人気が様々な要因が挙げられるだろうが、一番はオリンピックにも劣らない一級品の命の躍動を目の当たりにするからだと思う。

1920（大9）年に始まった箱根駅伝は2024年に100回大会を迎えた。5年の空白は戦争による中断。しかし、1943（昭18）年戦争の真ただ中で関東学生陸上競技連盟は『紀元二千六百三年 靖国神社・箱根神社間往復関東学徒鍛錬継走大会』として敢行した。当時の幹事長・中根敏雄（跳躍選手）を中心に多くの学生が文部省や軍部にいるOBを説得、不可能と思われた大会開催の扉を開いた。

中根は語った。

「昭和17年、スポーツの全国的行事は全面禁止になりました。先輩たちの戦死情報は次々入ってくる。

危機感を覚えました。特に箱根駅伝は一度絶やしたら二度と復活できないと思つた。箱根駅伝はただのマラソンリレーではありません。走つた者だけが知り得る伝統の重みを伝えていかなければ。今箱根駅伝を開いておけば、戦争で生き残つた誰かが戦後の時代に必ず復活させてくれる。いまやらねば死ぬに死にきれないと思ひました」

中根が戦死を覚悟していたように多くの学生が同じ覚悟を胸に生きていたのだろう。選手を集められず出場が叶わない明治大学をはじめ様々な大学の運動部の学生が手弁当で箱根駅伝を開催すべく奔走した。そしてついに昭和18年1月5日午前8時、靖国神社の大鳥居前から、日本大学、慶應義塾大学、法政大学、中央大学、文理科大学、立教大学、早稲田大学、専修大学、東京農業大学、拓殖大学、青山学院大学の1区走者11人がスタートを切つた。その中に中央大学陸上部キャプテン村上利明がいた。

「私は砲丸投げの選手でしたが一も二もなくメンバ

ーに入りました。この箱根駅伝を最後に死ぬ覚悟を
していました」

食糧難とはいえ砲丸投げで鍛えた85kgの巨体は生きた証を残すべく疾走。その年の10月、雨の明治神宮外苑競技場から学徒出陣。特攻隊員として出撃待機中の秋田で終戦を迎えた。出撃一週間前のことだった。

「1区で靖国神社から飛び出したから生きて戻れたのでしょう」と笑った村上は突然号泣し天を仰いだ。「18年の仲間には会っていません。戦死した仲間の名前を知るのは辛い」

誇りと命曰

戦死した仲間の中に立教大学の3区を走った高橋和民がいる。彼の箱根駅伝は妹の百合子さんによって語られた。

「父が牧師でしたので兄の生きる時代が平和で民主的な世の中であつてほしいと願い『和民』と名付け

たと聞いております。兄は幼い頃からスポーツが好きで中学に入ってから陸上競技部に入り、中長距離を始めました。競技会に出てはよくメダルを頂いて帰り、私たち妹にとつても自慢の兄でした。その兄の目標が箱根駅伝でした。中学でいくらメダルを獲つても箱根駅伝の選手になるのは難しいと、兄は一生懸命練習に励んでおりました。家族で一番の朝寝坊だった兄が朝5時には起きて自宅のあつた目黒から五反田までコースを工夫して毎日、それこそ雨でも風でも雪でも嬉々として早朝ランニングを欠かしませんでした。その姿に箱根駅伝がいかに大変なレースであるのか、兄がどれほどそのレースを走りたのか伝わってまいりました。私たち妹や時には母までも動員して、兄は固くなった筋肉をマッサージさせたりいたしました。

兄が立教大学に入学した頃、父の教会の仕事の関係で私たち一家は満州に渡りました。ですから私は兄が箱根駅伝を走る姿を見たことはありません。で

すがその素晴らしさは知っているつもりです。兄が手紙によく書いてきたからです。あの時代は日本が世界大戦にまっしぐらの時で、兄もいずれは戦場に立つ覚悟をしていたのではないでしょうか。戦場への現実が近づくにつれ、兄は箱根駅伝から生きる素晴らしさと人としての誇りをより鮮烈に学んでいったように思います。箱根駅伝への想いを綴った手紙の文面からそれが伝わりました」

高橋和民が初めて箱根駅伝を走った昭和13年5月に国家総動員法が施行、翌14年7月国民徴用令発令。16年12月8日真珠湾攻撃、太平洋戦争に突入。そして18年学徒動員が始まった。

「昭和18年の箱根駅伝を走った兄は、その年の9月に繰り上げ卒業となり10月に学徒出陣しました。そして一年半後、戦死の知らせが届きました。亡くなったのはフィリピンのマニラ周辺だということです。大変な大食漢でしたのに兄の部隊は全員が餓死したと聞きました。どんなに辛かっただろうと思いま

す」

しばしあふれる想いを飲み込むように沈黙した後百合子さんは決然と顔を上げ言った。

「兄を亡くした悲しみは半世紀経っても薄れませんが、箱根駅伝という憧れに出会い、それに向かって練習に励み、走って走って走りぬいて天国に駆け昇った兄に、私は『兄さん、幸せだったね』と言ってあげたい。あの時代、兄は確かに生きた証しを残したのですから。兄の戦死公報には兄の亡くなった日が四月十五日とありましたが、私は箱根駅伝が行われる一月二日・三日を兄の命日とひとり決めております。私の中の兄は出征した時の若いままです。箱根駅伝を見るたびに、ひとりひとりの選手に兄の姿が重なります。軽快に走る選手も、苦しんで走る選手も、すべての選手が兄の輝く日の姿です。いつまでもこの大会が続いてほしい。箱根駅伝が続く限り兄の幸せも続くように思います。私にとって箱根駅伝は兄そのものなのです」

足袋の匂い

高橋和民の命が閉じようとしていたその頃、海軍の特攻隊員として出撃命令を待っていた一人に、日本大学の成田静司がいた。彼の日記にこうある。

『昭和20年3月27日 晴れ 敵はいよいよ沖繩島に上陸を開始せり。今日より我々に転進準備が下された。午前、特攻隊員写真撮る。これが最後の写真になるかも知れん。父さん母さんいよいよ私も最後のご奉公の出来る日が参りました。遺言と云つてもゆつくり書くひまなく、この日記帳が私の遺言になります。かも分かりません。二四年御世話になった御恩を謝します。(中略) 思えば箱根駅伝でのあのスタートラインだった九段の鳥居が人生最後のゴールインでした。今あのスタートラインに立った様な無我無心鏡の如き気持ちで日を暮らしています』

出撃命令が下ったこの日、成田はただ一度出場した箱根駅伝に想いを馳せた。

「私は400メートルと800メートルが専門でした。昭和17年秋に東海道を走る箱根駅伝が2年ぶりに復活するという事で私にも声がかかりました。ほとんど命令です。受けるこちら俺がやらねばの信念に燃えました。箱根駅伝は当時から学生スポーツの華です。戦前なら強豪揃いの日大で私など入るすきもない。でもその頃はどの大学も学生を兵隊に取られて10人集めるのに苦労してたんです。

10月から始まった合宿で全区間を試走させられました。その結果6区山下りに決まりました。つま先で走るトラックでのフォームを足の裏を地につけて腰を落として走る長距離フォームに2か月で変えました。物がないので先輩たちが残っていたマラソン足袋を何度も繕いながら練習しました。他人の足袋だから足はマメだらけ。しまいには履く足袋もなくなつて血だらけの裸足で走りました。練習が辛いなんて思ったことはないです。箱根駅伝を走るんですから。

大会直前、誰の采配か足袋屋のハリマヤさんから真新しいハリマヤ足袋がひとり2足配給されました。うれしくて有難くて、机の上に置いて蝋燭を灯しお神酒を供えて手を合わせました。あの足袋の生ゴムの匂い、今でもはつきり覚えています」

成田静司の大会当日の日記。

『昭和十八年一月五日 快晴 一年の総決算の日が遂に来了。九時山に上りて待つ。一区二区三区四区の戦況は如何に。気が気でない。箱根に入ったのは我が校非ず慶應の岡が竹中監督の伴走にて入つてきた。小田原にて六位の日大二位にて入る。五十m後方を法政だ。一着との差五分四十五秒。いよいよ明日の決戦は俺の脚にかかっているのだ。やるぞあの日を思い出して。自信勝算はある。明日は本当に体が碎けて粉になる気で下ろぞ。山手が待つているぞ山手が』

『一月六日 快晴 昨夕なかなか寝付かれなかった。朝五時半起床食事。七時前体操。杉山氏と箱根まで

アップ。皇太子殿下御通りで三十分遅くスタート。慶應より五分四十五秒遅れてスタート。途中十七秒後より来た法政武田に抜かれる。湯本を過ぐる時、慶・法・日百m以内に入る熱戦。ガード手前で小生慶應を抜き二位にて山手に。山手三位にて平松、平松二位にてタッチ、横田三位にてラストへ。一位との差一分半、遂に永野氏トップに出て九段に入つたのはピンクピンク日大だ。熱戦の末遂に勝つた』

この大会から48年、成田は自ら封印した箱根駅伝への想いを解放した。

「あの大会はね、勝つた負けたは関係なかった。靖国のゴールに飛び込んでくる選手を参加した大学の全員が涙と歓声で迎えたんです。お互い抱き合つて健闘を称えました。ああいう想いは後にも先にもない。あの箱根駅伝は私の人生において最も美しいものでした。あの大会を走つた仲間の半分ぐらいは戦争で死んでいます。まもなく50年になる。語りたくても語れない彼らのためにも生き残つた私達が話さ

なければ。70になってやっとそんな心境になれました」

復活と希望

この大会が終わった時、関東学連幹事長・中根敏雄は『箱根駅伝を残した』と感じたという。その想いは中根ひとりのものではなかった。それが証拠に1947（昭和22）年、箱根駅伝は復活した。その時の関東学連幹事長は、戦中の大会で7区を走った立教大学の高橋豊。1946（昭和21）年3月に復員した高橋はその年の5月、立教大学に復学するため池袋にある母校へ向かった。焼け跡と化した池袋には闇市が立ち並び、若い者が生気のない顔で朝からカストリをおおっていた。懐かしい陸上部の部屋は馬小屋となり、すえた匂いの藁の中に砲丸の球ひとつが投げ出されていた。胸が締め付けられたと高橋は振り返った。

「何としても箱根駅伝を復活する。正月の東海道を

ランニングとパンツ一丁で走って、国は敗れても希望を持つ気力まで捨ててはいないんだという俺たちの姿を日本中の人に見てもらおうと思いました」

奇しくも国内で終戦を迎えた中央大学の村上利明が想いを同じくする仲間と関東学連の基盤を整えるべく動いていた。ここに合流した高橋は自ら幹事長を引き受け箱根駅伝復活第一回を翌年の正月と決定。東海道を占領国道としていたGHQを相手に交渉をはじめた。話だけは聞くとその返事だったので意を決して乗り込んだものの「駅伝」が通じない。説明に行き詰った高橋が咄嗟に「クロスカントリーリレーゲーム」と叫ぶとそれが通じて許可が出た。ただし、試合当日のGHQの同行が条件に付いた。もう一つの難題は資金調達。戦前に資金援助をしてくれた報知新聞社が読売新聞社に合体したため交渉は一から始めなければならなかった。余分な資金は新聞社にもない。はじめは相手にもされなかったが、高橋を含む6人の学生が交代で日参する熱意に加え様々な

O Bが口添えした。中には他紙のO Bもいた。その結果、決断は読売新聞社の重役会議に委ねられた。高橋の胸算用では調達可能な資金は10万円。一校一万円として10校を超えたら予算はパンクする。高橋は出場を希望する大学に代田橋10マイルコースの事前レースをお願いした。これが後の予選会の始まりだった。しかし、幸いにも10人のランナーを集められた大学は10校だったので出場希望の大学はすべて出場することになった。

タスキと平和

戦中の大会同様、スポーツを愛す多くの学生やO Bの手弁当の働きで、昭和22年1月4日午前7時箱根駅伝復活第1回大会はスタートした。

「レース後GHQに行ったら同行した幹部が、駅伝は世界に誇れる素晴らしい競技だって言ってくれてね。嬉しかったですよ。箱根を走ればわかるけど、渡し渡されしていく中でタスキが一人一人の気持ち

を吸い込み、しまいには心そのものになるんです。箱根駅伝の命はあのタスキだと私は思うんですよ」

この復活大会に関わったかは聞き損ねたが、戦中日本大学の6区を走った成田静司もふるさと青森で長く陸上競技の普及に努め、青森陸協の会長として尽力した。

兄を戦争で亡くした高橋百合子さんは日本テレビに何度も歌を書き送ってくれた。

『戦に果てにし兄も走りたる箱根駅伝なりテレビに見つむ』

この歌の横に、「この平和がいつまでも続くよう祈っている」と添え書きがあった。世界のあちこちで戦火が絶えない今、この祈りを大事に育て広げ、命の躍動に心躍らせる日々を長く長く守っていきたいと心より思う。

特集 スポーツの未来のためにⅡ

監督が怒ってはいけない大会

——11年目の手応え

構成 首藤正徳
写真 山内亮治

バレーボール女子元日本代表の益子直美さんが主催する「監督が怒ってはいけない大会」が2025年に11年目に入った。暴言や体罰など高圧的な指導が根強く残るスポーツの現場を変えようと2015年から全国各地で開催。2024年には大会の常連チームが全国制覇するなど活動が実を結び、近年はバレーボール以外の競技にも広がった。大会の歩みと取り組み、成果について益子さんに語ってもらった。

(本稿は2025年10月16日、東京都文京区・筑波大学東京キャンパスで行われた日本スポーツ学会「第133回スポーツを語り合う会」の講演をもとに構成したものです)

益子直美(ますこ・なおみ) 1966(昭41)年5月20日、東京・葛飾区生まれ。中学1年でバレーボールを始め、共栄学園高3年で日本代表に選ばれた。卒業後に実業団のイトーヨーカドー入り。90年にエースとして日本リーグ初優勝に貢献した。日本代表では世界選手権やワールドカップに出場。92年の引退後はタレント、スポーツキャスターに転身。15年から「監督が怒ってはいけない大会」を主催している。現在、日本スポーツ協会副会長、女性初の同協会日本スポーツ少年団本部長を務める。

横へのつながりと成果

2015年から「監督が怒ってはいけない大会」を全国各地で主催しています。小学生のバレーボール大会から始めた活動で、25年4月から11年目に入りました。怒った監督に「1セット分、落ち着いてください」と×印の付いたマスクが渡されて、子どもたちが笑顔で楽しくプレーできるようにルール設定をしています。

最初は監督が怒らないというルールの大会を開催するだけでした。監督に「怒らない代わりにどんな指導法があるんだ」と聞かれて、私は答えられませんでした。この10年でスポーツメンタルコーチングを学び、アンガーマネジメント（怒りの感情をコントロールする心理トレーニング）の資格を取得して、今は大会中に指導者や保護者に向けたセミナーも実施しています。

21年にバレーボール以外にも活動を広げようと

一般社団法人化しました。なかなか横のつながりがつくれなかったのですが、22年に日本財団が主催する社会貢献活動に取り組むアスリートや団体を表彰する「HEROS AWARD」を受賞して、23年に日本スポーツ協会副会長、日本スポーツ少年団本部長に就任した頃から、急激に社会に広まって、多くの競技のアスリートが手伝ってくれるようになりました。

例えば熊本ではサッカーの大会を元日本代表の巻誠一郎さんが100チームほど集めて開催してくれています。神戸や茨城はバレーボール女子元日本代表の方にやっていたいています。福岡県と宮城県は地元のスポーツ協会が主催していますが、多くが保護者や指導者が個人で手を挙げて大会を実施しています。秋田は空手、東京・立川が水泳など、この2年ではいろんな競技がいろんな場所で行われるようになって、私もびっくりしています。

開催初年度は「監督、怒りましたよね」と言う

「怒ってねえしっ！」と逆切れされて本当に怖かったです。腕組みとか貧乏ゆすりも注意させていただきます。「怒らないとなめられる!」「褒めると調子にのる!」と、怒りを我慢するのに苦労している指導者も多いです。

そして、よく言われるのが「何でもかんでも怒っちゃだめじゃないだろう」です。もちろんそうです。私たちの大会でも子どもたちが怒られることはあります。それは「ルール、マナーが守れない」「取り組む態度、姿勢が悪い」「いじめ・悪口を言う」「命にかかわる事故になる危険がある」ときです。「何が悪いのか子どもたちが分かる言葉で注意して下さい」とお伝えしています。何でもかんでも怒っていると、子どもたちは何が悪いのか理解できないんです。

絶対に怒ってはダメなのが、試合中のミスです。指導者には「ミスはしたけれどチャレンジしたこと」を認めてあげて下さい」とお願いしています。そこ

をしつかりと線引きして、保護者、指導者、子どもたちにも共通認識として伝えていきます。

ふだん怒って指導している監督の多くは、この大会で勝利を手放してしまいます。試合前の円陣で「今日は楽しめばいい。勝ち負けは関係ないから、オレは怒らないからな」と声かけする監督も少なくないです。でもスポーツは勝敗があるから面白いし、成長もできる。だから「必ず勝利を目指してください」とお願いしています。高圧的な指導や罵声に頼らなくても、勝利と育成の両方を実現できる指導法は必ずあるはずです。子どもたちの性格やタイプを見極めながら、それをこの大会で見つけてほしい。それが指導者の腕の見せどころだと思っています。

こんな私も5年目くらいまではブレブレでした。活動が新聞などに掲載されると、SNSに届くメッセージの8割が批判でした。「お前もそうやって育ってきたんだろ」「世話になった監督を否定するのか」「そんな甘いことをやっているから日本のバレー

「界はダメになるんだ」といったコメントばかりで、私も「やっぱり怒りも必要なのでは……」と考えたりして「怒らなくても勝てます」と強く言えなかつたんです。

それが24年夏、第1回からずっと一緒に活動している「幸袋ジュニア男子」（福岡県飯塚市）が全日本小学生バレーボール大会に初出場で初優勝したんです。直後に監督から「怒らないで勝てました！」とメッセージが届いて、10年かかったけれど結果を出してくれるチームが出たんだと、本当に感動して涙が出ました。ようやく大声で「怒らなくても勝てる」と言えるようになりました。

では私が大会で子どもたちとどのように関わっているのか具体的なエピソードを紹介します。秋田大会ですごく怖い監督がいたんです。円陣で「おめえらっ！ 楽しんでやれ！（秋田弁）」と「なまはげ」のような怖い顔で怒鳴って、小学5年生のバレーボールチームの誰も笑っていなかったんです。私はタ

イムアウトを取って、子どもたちを集めて「どうすれば楽しくできる？」と聞きました。すると1人1人手を挙げて「スパイクを決めたらベンチにハイタッチに行く」とか「ミスした選手に声かけする」とか、いろんなアイディアが出ました。最後に男の子が「10点取りたい」と言ったら、みんなが「取りたい。10点取りたい」と賛同して目標が決まりました。

そうしたら、これまで3点や4点しか取れずに負けていた子どもたちが、懸命にチャレンジしたことで、たくさんの奇跡が起きて15点も取れたんです。小学生の大会は21点制なので試合には負けましたが「チャレンジ賞」を受賞しました。表彰式で女の子が「プロの人に教えてもらったらできた」と言いましたが、私は「どうすれば楽しくできる？」という投げかけを一つしただけでアドバイスは一切していません。怖い監督に言われたことだけをやっていた子どもたちが、自分たちで決めた目標に一生懸命にトライして達成したんです。すごく成功体験になっ

私の現役時代



『怒ってはいけない大会』開催の理由



たと思います。「負けても楽しかった」と、笑顔で言われて本当にうれしかったです。

怒る指導の副作用

この活動をなぜ始めたのかをお話しします。私は昭和のスポ根アニメ『アタックNo.1』に憧れて中学1年でバレーボールを始めたのですが、練習が怖くて怖くて仕方なかった。特にエースだった高校時代は、負けたり、ミスしたらワンマンレシーブ（1対1でのレシーブ特訓）を罰練習としてやらされました。野球でいえば1000本ノックのようなものではないか。本当に怖かったです。ミスをするとなら、容赦なく往復ビンタが飛んできました。

今から言えますが、高校ではエースでしたが、私にトスが上がつてほしくないと思っていたし、レギュラーにもなりたくなかった。殴られるのでミスを恐れてチャレンジもしない。怒られないことが目標の毎日になっていました。

準優勝した春の高校バレー（全日本バレーボール高校選手権）の表彰式の写真を見ると、ベスト8進出の目標を達成したのにみんな表情が暗いんです。卒業後、同窓会で「表彰式が終わったら絶対殴られると思っていた」と同じことを考えていたことが分かりました。私のほつぺたが赤いのは準々決勝の後に往復ビンタされた手の跡です。当時はそんな感じでした。

私は高校の時にジャンピングサーブやバックアタックをやっていて、このプレーを女子で一番最初にやった選手と言われています。だから体と技はすぐ成長させてもらいました。でもその土台になっていく心がやせ細っていました。こういう練習を乗り越えて強くなっていく選手もたくさんいたので、私は本当に弱いなあ、スポーツに向いていないなとずっと思っていました。

18歳で卒業して実業団に入りました。当時の監督は主体性をモットーにされていて「自分で考えてや

れ」と言われたのですが、自主性や主体性の意味が分かりませんでした。指示がなかったもののほとんど1日1日を過ごしていたように思います。

日本代表になって世界選手権やワールドカップにも出場しましたがオリンピックには出場していません。自分では「根性なし」というコンプレックスを50歳近くまで抱えていました。スポーツは本来、チャレンジ精神や向上心、自信を学ぶ素晴らしいツールなのに、自分には足りないものがすごくあった。大人になっても怒る指導の副作用が強く残っていたんだと思います。子どもを取り巻くスポーツ現場の環境を変えたいと思ったのは、そんな私の経験が大きかったです。

現役の頃は自分の気持ちなんてとても言えませんでした。今は本当にこの活動を覚悟をもつてやっているの、堂々と当時の気持ちを言えるようになりました。

底をついた指導力

「監督が怒ってはいけない大会」を始めた後、大きな失敗もしました。大学の女子バレーボール部の監督に就任しました。私は指導者資格を持っていませんでしたが、ベンチに座るコーチが持つていたので大丈夫とのことでしたので引き受けることにしました。学生たちの頑張りもあって、関東6部リーグからストレートで3部まで昇格しました。ただレベルが上がったことで、私の指導力が底をついてしまっただんです。

本格的に指導法を勉強しなければと思ったのですが、情けない話ですが「50歳をすぎているのに」とか「元日本代表なのに」など変なプライドが邪魔をして学びに行きませんでした。それでどうしたかと言うと「怒り」を使ってしまったんです。私の成功体験は怒りの指導しかなかったもので、もうこれしかないと思って、あんなに自分がされていやだったこ

とをしまいました。

「怒り」を使うと指導は簡単でした。ワンマンレシーブをしたり、罰を与えたり……手拔きの指導だとすぐに分かりました。学生たちはすぐ怒られたことで、同じ方向を向くようになって結果も出ましたが、一気に主体性を失いました。これまで学生たちで話し合ってプレーしていたのに、1本1本ベンチの私を見るようになりました。何てことをしてしまっただらうと、本当に自己嫌悪に陥りました。落ち込んでメンタルをやられてストレスで呼吸困難になって、不整脈の病気で心臓を手術して、監督も辞任しました。

病院で「何であの時、学びに行かなかったんだらう」とすぐ後悔しました。このままだと私はずっと成長できないと思い、退院後にすぐに活用できるスポーツメンタルコーチングの学校に一番最初に行きました。メンタルが弱くて病気になったから強くなりたいたいと思ったのですが、メンタルは「強い弱い」

で計るのではなく「安定か不安定か」ということを知り、どうやって整えるかを学びました。それからアンガーマネジメントについても学び、資格を取得しました。

以来、スポーツメンタルコーチングやアンガーマネジメントについては、大会中のお昼休みに約1時間、指導者にセミナーを受けてもらい、一緒に考える時間をつくっています。

開会式のあとはスポーツマンシップについて学ぶ時間もつくっています。そこで子どもたちに「自分がスポーツマンだと思う人」と聞くと、ほぼ手が挙がりません。「サーブでミスをするから」「全国大会に出ていないから」など「上手くないと」「全国大会に出場していないと」スポーツマンじゃないという言葉が返ってきました。広辞苑には「運動競技の選手またはスポーツの得意な人」と書いてあります。でも私たちの大会はスポーツ発祥の地・イギリスの辞書にある「スポーツマンⅡグッドフェロー（よ

き仲間）」を使っているから大丈夫だよと伝えていきます。スポーツマンとは上手い下手は関係なくて、他人から信頼されるかつこいい人だよと。「そのために今日はどう頑張る？」と呼びかけています。

子どもを変えた褒め言葉

最後に指導者のチャレンジの話もしておきます。高知大会で歴代一番怖い監督が出てきました。70歳のベテランです。挨拶に行ったら「オレはふだん怒ってる。だから今日は黙る」と言われました。「黙るだけじゃなくて、今日は子どもたちを褒めて下さい」と返すと「褒めるところなんか何もない」と。「いやいや絶対にあるはずですよ。お手伝いしますから、ぜひチャレンジしてください」と言つて、試合中に監督の隣に座りました。

スパイクを打った子を見て「どうしてあんなにいいスパイクを打てるようになったんですか？」など1人1人について聞いていくと、監督は「あの子は

褒めるところなんてないと思う・・・と子どもたち💧

監督さん
大きな声ではっきりと、一人一人に伝えてくれた！



踏み切り足を修正してよくなった」とか全部答えられるんですよ。「みんなのいいところが分かっているから試合が終わったら言ってあげて下さい」とお願いしました。

監督は「そんなのできない」と拒んでいたのですが、試合後、子どもたちの肩に手を乗せて「今日のスパイクはよかった。よく辛抱してできるようになった。素晴らしい」。そんな感じで6人全員

を褒めてみんなニコニコになりました。ところが実はベンチにレギュラーじゃない子が1人残っていたんです。

私もその子について監督に聞くのを忘れていて「どうしよう」と思っていたら、監督がその子の肩に手をかけて「あなたの笑顔は素晴らしい。みんなに勇気を与えている。ありがとう」と言っただけです。そうしたらその子が泣きだして、周りにいた大人たちも号泣してしまいました。

彼女はバレーボールを始めてまだ4カ月で、監督に1度も声をかけられたことがなかったそうです。親には「私は下手だし辞めようと思う」と相談していたようですが、初めて褒めてもらって「続けてもいい」と思ったそうです。私も褒めることはできるのですが、やはり監督からの言葉というのは子どもたちを変えるすごいパワーがあるんだということを学ばせていただきました。あの子は今もバレーを続けています。

スポーツで戦争を早く終らせるために ——富田正一氏が世界的な視野で語る。

取材・構成 長岡裕生

北国出身者が主流のアイスホッケー界で元オリンピック代表GKの富田正一氏は、珍しい東京都京橋生まれの江戸っ子だった。現役引退後は国際アイスホッケー連盟の理事に最年少で就任。信念を貫く姿勢が世界で高く評価されて、理事・副会長を34年も務めた。その半生とともに長引く戦争や紛争を終わらせて平和を取り戻すための知恵を聞いた。



富田正一氏に贈られた1960年スコーパーレー
冬季オリンピックの出場認定書

富田正一（とみた・しょういち）1936（昭11）年1月1日、東京都中央区生まれ。明治大学卒業。アイスホッケー日本代表GKとして60年スコーパーレー冬季オリンピック、62年世界選手権出場。73年に日本アイスホッケー連盟の理事、03年に会長に就任。また78年に国際アイスホッケー連盟の理事となり、94年に副会長に就任した。02年に国際オリンピック委員会（IOC）より「オリンピック・オーダー」銀賞受賞。06年に国際アイスホッケー連盟殿堂入り。現在、日本オリンピック委員会（JOC）名誉委員。京橋二丁目西町会会長。

——ご実家のあった東京都中央区の京橋付近は、1945（昭和20）年3月10日の東京大空襲で被災されたそうですが……。

富田 そうです。私自身は9歳で山梨県に疎開していたので実際に燃えるのは見ていませんけど、疎開先で真っ青な空の中をB29（米軍の大型爆撃機）が大群で東京方面へ飛んでいくのは見ました。

——東京の下町を中心に10万人以上もの人が亡くなったそうですが、ご家族はご無事だったのですか。

富田 父は大阪の工場に行っていて、母と兄弟は山梨と一緒に疎開していたので無事でした。後日、京橋に戻ると実家は跡形もなく、焼け野原で2、3のビルが残っているだけでした。神奈川県の日吉にも家があったので、とりあえずそちらに移っている間に、資材をかき集めて京橋に二階建ての家を建てて店を再開したのだと思います。店はふすま紙や障子紙、表飾材料を販売、当時の日本家屋に欠かせないものを扱っていたので、戦後は飛ぶように売れたよ

うです。

——焼け野原と化した地元の惨状に、気持ちが悪えたり、力が抜けてしまったりしませんでしたか。

富田 いや、そういう気持ちになったことは思い出してもないです。ションボリとはしなかった。子どもだったこともあるでしょうけど、むしろ何とか生きてゆこうという気持ちだけだったと思います。

——絶望的な状況にも、下を向くことはなかったのですね。

富田 山梨の疎開先ではいじめられました。半ズボンに靴と靴下をはいて学校に行ったら「なんて格好をしているんだ、長ズボンにわらじをはけ！」と言われてね。自分でわらじを編んだんです。長ズボンをはいて行くと「何で皆と同じようにツギが当たっていないんだ」と言うから自分で無理やり破いたりしてね。雪合戦をすれば全員が私めがけて雪玉をぶつけてきました。母は身体が弱くて、私は長男でしたから、家に帰るとまき割りや水くみの力仕事を一

人でやっていました。近くの農家に頭を下げて食料を調達したりもしていましたね。

「なにクソ」という毎日で、負けられないという気持ちでした。しばらくして日吉に戻ったときに親が慶應の幼稚舎（小学校）へ入れようとして家庭教師をつけたのですが、もう嫌で嫌で、そのお兄さんが来たときに顔にボールをぶつけてお帰りいただきましたよ（笑い）。悪い少年だね。オヤジも怖くないし、何も怖くなかった。学校の先生に殴られたときは殴り返して（笑い）。母親が学校に呼ばれたとき——反骨精神の塊のようですね。悪いというより、そのはち切れんばかりの生命力があつたからこそ、戦後をたくましく生き抜いたということでしょう。

富田 確かにエネルギーはありましたね。小学校は5回も変わりましたが、どんなにいじめられてもクシユンとならなかった。

——東京の京橋の出身でありながら、氷上の格闘技といわれるアイスホッケーを始めたのは、そのへん

にも理由がありそうですね。

富田 おつしやる通り（笑い）。明治中学に入つて初めは柔道やテニスをやっていました。その頃、後樂園のリンクでオール明治とニューヨークのメトロポリタンのアイスホッケーの試合があるというのでお手伝いに行つたのです。コートから出たパックを拾つたりするような役割でした。その時に「こんな素晴らしいスポーツがあつたのか！」とすっかり魅了されました。中学生でも希望すれば明治高校のアイスホッケー部の練習に参加できました。正式に入部できるのは高校に入ってからでしたが。

——何とポジションはゴールキーパー（GK）を選ばれました。どのような理由だったのですか？

富田 初めはディフェンスもやっていましたが、GKはなり手がいなかったし、一人でも鍛錬できますから、試合に出られるのではないかと思って、お年玉でGK用のステイックを買いました。

——アイスホッケーはスケート技術も磨かなくて



1960年スコーパーレー冬季オリンピックでヘルメットを着用せずにプレーするGK富田正一氏(中央)

はならないですし、パックの扱いも独特です。練習環境はどうでしたか？

富田 高校の先生からは止められました。スケート場は営業時間外しか使用できないので夜は午後10時から、朝は午前6時からしか借りられません。深夜帰宅で早朝練習ですね。大きな防具を抱えた大荷物での移動で、よく犬に吠えられました(笑い)。

——ご家族はアイスホッケーに夢中になった息子さんを見ていたのでしょうか？

富田 そのうち止めるだろうと思っていたのでしょうね。

——明治大学でもアイスホッケー部に入学されました。苦小牧や釧路(北海道)、青森など子ども頃から競技に親しんだ学生が集まる中で、江戸っ子の富田さんはハンデイを感じませんでしたか。

富田 その分、努力をしました。階段も2段跳び、3段跳びで上り下りするようにしていましたし、東京駅のような人通りの多い場所では同じ色の服を着

た人を一瞬で見る練習をしました。今と言う動体視力の訓練ですね。試合での選手の動きを把握する練習を怠らないようにしていました。3年の終わり頃には試合に出られるようになりました。

——明治大学―実業団の岩倉組と活躍されて、1960年のスコーバレー（米国）冬季オリンピックで、日本代表メンバーとして日本アイスホッケー初のオリンピック出場を果たします。東京・京橋生まれの冬季オリンピック代表選手は前代未聞ですね。

富田 京橋周辺の人はみんな驚いて、氷川丸でバンクーバー（カナダ）に出航するときに横浜港までバスを連ねて見送りに来てくれました。

——ご自身ではどんなお気持ちでしたか。

富田 日本代表になって日の丸を付けるのが夢でした。疎開先でいじめられて、このままでは終わらないぞとずっと思っていました。あの頃のいじめっ子たちに“どうだ！”と見返してやる気持ちでした。

横浜から2週間かけてバンクーバーに着き、そこ

から約1カ月は鉄道で町々に寄って親善試合をしました。ロッキー山脈にある町では日系人の熱烈な歓迎を受けました。戦中戦後に肩身の狭い苦しい生活を強いられた人たちが、日本チームに同行していた竹田の宮様（戦後皇族離脱した竹田恒徳氏）に会うために集まった。日の丸背負う私たちにも“日本頑張れ、万歳！万歳！”と大声援をいただきました。

——スコーバレーオリンピックで日本はフィナンランドに引き分け、オーストラリアに勝利して8位。驚くことに2年後の62年の世界選手権ではBグループで5戦全勝しています。

富田 後悔したくなかったので一生懸命でした。5戦すべてGKを一人でこなし、マスクも着けずに戦い抜きました。

——えつ、アイスホッケーのGKなのに試合でマスクを着けていなかったのですか？

富田 NHL（北米のプロアイスホッケーリーグ）にも一人いましたけど、マスクを着けなくてもよか

った時代ではありません。防具も少しでも重い部分は外して布を貼り付けて、身体の動きをよくしていました。カナダなんか1試合に150本もシュートを打ってきますからね。私は身長167cmと小さいのでマスクなど余計なものは着けていられなかったです。海外では「スモールレスト・キーパー」(一番小さなGK)なんて呼ばれていました。

——時速160km近い速度で硬質ゴム製の円盤パックが飛んでくるポジションです。よくケガをしませんでしたね。

富田 オリンピックの前に日光で試合をした時は屋外で氷上がキラキラ光っていたこともあって、パックを額で受けて、幅8mあるリンクと観客席の間のガードの外に飛び出した。もう血だらけで、倒れたまま翌日まで気が付かなかった。大けがはニュースにもなったようです。

——岩倉組で4シーズンプレーした後、実家に戻って老舗家業を継がれました。その一方、1978年

にはアジア人初となる国際アイスホッケー連盟の理事に最年少で就任されました。

富田 アメリカの理事から「ぜひ手伝ってほしい」と言われて立候補したのですが、アイスホッケーの盛んな国は「何で日本から?」という態度でした。「イエローがアイスホッケーを?」という感じでしたから、私は反論したんです。「日本人はイエローじゃない。ナチュラルカラーなんだ。樹木の皮の色や土の色に近い。あなたの肌の色はホワイトで、目は青で、髪は金色、太陽の熱量が少ないからです。肌が黒くて髪の毛が縮れている人は太陽の熱量が多い地域だからです。日本はその中間で、一年中ナマモノが食べられる。海に囲まれ、山や川があり、四季があるから感性も優れているんだ。イエローじゃなくてナチュラルなんだ」と言い返しました。

——それで、その方は黙ったのですか。

富田 黙っただけじゃなく、私の主張を評価して信念を貫く奴だと思ってくれた。それから一番仲良く

なりました。何か問題やトラブルが起きそうになると「ショー（正一）はどう思う？」と、必ず意見を求めてくるようになりました。

——信念を貫く姿勢が、信頼関係を生み、国際連盟の理事や副会長を34年も続けられたのですね。

富田 続けたいと言っても続けられるわけじゃない、選挙でしたからね。信頼関係はあったと思います。国際連盟は世界全体のことを考えて進行しなければならぬのに、とかく自国の利益を優先する発言が多くなるときがあります。そんなときに必ず意見を求められました。

——競技振興のために本場の試合を日本で見る機会を増やすようにご尽力されたそうですね。

富田 あるときロシア（当時ソ連）のナショナルチームやカナダの強豪クラブの試合を日本で見たいという声が出ました。私もぜひ……と思いました。が交渉役がいませんでした。大手代理店などにお願したら、どんな請求額を提示されるか分からない。そ

こで私がソ連のアイスホッケー連盟の会長に話をしようとしたが、スケジュールがいつぱいで会えない。「困った、困った」と言っていたらオーストリア連盟の会長が「サウナに誘うといい」と知恵をくれました。確かスイスだったと記憶しています。ロシアのコロスコフ会長をサウナに誘ったらウオッカと水を持ってやってきたのです。そして翌日には契約書にサインをしてくれました。1982年2月に世界の超一流のソ連やカナダが参加する大会の日本開催が実現して、国立代々木競技場が満員になりました。嬉しかったですね。

——素晴らしい行動力でしたね。

富田 その後もチェコとスウェーデンなど世界の強豪国を招きました。連盟は企業からのスポンサー料だけをあてにするのではなく、自分たちのアクティビティー（活動・行動）で4年間で3億円を貯めました。ジュニアチームを世界大会に派遣する資金にも運用しました。

NO WAR

——そういえば1980年のモスクワ夏季オリンピックを日本はボイコットしましたが、最後まで反対した6つの競技団体のうちの一つがアイスホッケーでした。富田さんはロシア人との付き合い方を身をもって知っているんですね。

富田 ロシアの社会には二重、三重の層が存在すると思います。一番下の人は何も決められないし、結論も出せない。中間の人は上の顔色を見るから、物事が180度ひっくり返ることもあります。

——今の世界情勢の中でスポーツの役割は決して小さくはないと思っています。ロシアとウクライナの戦争は4年も続いています。オリンピックなどの世界大会のたびにロシアの選手の出場について議論がされますが、どう考えですか？

富田 IF（各競技団体の国際連盟）の会長から同じようなことを聞かれました。侵略されたとして

も戦争になって交戦状態が続いています。歴史をさかのぼるとウクライナと一口で言っても西部、中部、東部とそれぞれルーツが異なっています。ロシアのルーツが強くてロシア語で生活している地域もある。ここまできたらどちらも負けられない。紛争は時間をさかのぼると、あのととき相手がこうしたから、だから自分たちも……となって、水かけ論が続くだけです。だから喧嘩両成敗で、戦争や紛争中の国・地域の選手はどちらもスポーツ大会には出場できないことにしたらどうか？ と言ったのです。

——どちらもNG、それは斬新な考えですね。これまでスポーツ界は戦争に振り回されてきました。戦争を終わらせ、平和を取り戻すために、スポーツ界にも覚悟が必要かもしれないですね。戦争をしている国はともかく出場不可。確かに非暴力「NON WAR」はスポーツの本質だという気がします。

富田 そうすることで、戦争や紛争を早く終わらせることになるのではないかと思うのです。

『走』第16回



日本のスポーツは

「とにかく走る」ことが基本!?

玉木正之

「走ることは、あらゆるスポーツの基本。だから、とにかく走れ。時間があれば、いつでも走れ」

中学高校とバドミントン部の活動に励んでいた私は、顧問の先生が口癖のように繰り返した言葉を信じて、言われるままに走っていた。

私だけではない。運動部所属の生徒は、とにかく走らされた。野球部でもサッカー部でも、バレーやバスケットやテニスや卓球部でも、練習の開始と終了時には、必ず列を揃えて、イッチニイ、イッチニイ……と、声も揃えて、とにかく走った。スポーツライターとなって、この「とにかく走る」という行為に疑問を抱くようになった。欧米のスポーツ選手のトレーニングでは、集団で声を揃えて走る姿をまったく見なかったからだ。そ

こで、プロ野球のトレーニングコーチや日本代表クラスのスポーツ選手のコーチなどに、疑問をぶつけた。すると……

「ランニングは全身運動の基本で、身体の動きを整える効果があります。しかし集団で声を出して走るのは、チームの団結や一体感を醸成する行為で、身体の問題というより、むしろ心の問題ですね」

という答えが、異口同音に返ってきて納得。

しかし今も納得できないのは、私の息子が少年野球チームに入り、日曜の親子野球大会に参加した今から20年前くらいのこと。

集まった我々父親に向かって元高校球児の監督が、こう言ったのだ。

「では、まずグラウンドを3周走りましょう」

子供と野球を楽しむ休日、何故!? と思いつながら我々父親たちは、苦笑いで一体感を醸成しながら、ハアハア息を切らせて、とにかく走ったのだ。日本のスポーツの指導者は、何故か、とにかく走らせるのが好きのようですね。



夢劇場『馬』

No.41



風 穴

長田渚左

日本人は10月第1日曜日に開催される凱旋門賞に特別な執着がある気がする。

1969年のスピードシンボリから2025年までのべ38頭が挑戦し、2着が4度もありながら、ただの1度も勝てないレースだからだろう。

ある日、フランス人の友人が「4度も2着に入っているのだから日本の競馬のレベルの高さは証明されている。勝負は時の運だ」と私に微笑んだ。確かにそう言われればそうかもしれない……とも思ったが、38回も挑戦して時の運だけでは済まないという気がした。プロ野球の野村克也元監督の「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」という名言が頭をよぎった。

2025年の凱旋門賞も日本馬が3頭も出走したが、ビサンチンドリームの5着が最上位で、14着、16着と惨敗だった。

かつてスピードシンボリに騎乗した野平祐二氏が「(凱旋門賞で) 勝つことがあるのだろうか……」と溜息混じりにもらしたのを聞いた。いつも明るく、口笛が得意だったので「悲痛なつぶやき」は特に印象に残っている。

そんなことを考えていた25年11月、ダートの世界一決定戦「ブリーダーズカップ・クラシック」で、フォーエバーヤングが日本馬として初めて優勝したというニュースが飛び込んできた。

前年の同レース3着。同年のケンタッキダービーも3着だったことから、実力は分かっていたが、レースを勝ち切る難しさを知る者にとつては、涙が出るほど嬉しい快挙だった。一般的知名度は凱旋門賞の方が上だが、世界最高峰のレースとしての海外での認知度は凱旋門賞に並ぶ。

フォーエバーヤングの開けた風穴を突破口に、日本競馬の歴史が一気に動き始める……新たな年を迎えて、そんな予感がある。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。申し込み住所が変更になりました。

〒168-0063
杉並区和泉1-40-13-401
スポーツネットワークジャパン
『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのため、やむをえず変更いたしました。

6冊まで 送料 500円
12冊まで 送料 1000円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の春号第70号は2026年3月

中旬刊行を予定しています。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館で読みになります。ご利用ください。

- 世田谷区八幡山・大毛社一文庫
- 世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館
- 港区広尾・東京都立中央図書館
- 千代田区永田町・国立国会図書館
- 港区芝・東京都人権プラザ図書館
- 新宿区霞ヶ丘・日本スポーツ協会資料室

【理事】

阿部雄輔／五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリンピック・アカデミー顧問）／菊幸一（国土館大学特任教授）／佐久間昇二（びあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）／森林貴彦（慶應義塾幼稚舎教諭）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（京都工学院高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192
埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15
早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じですか？

スポーツゴジラは年4回春・夏・秋・冬の季刊で発行。

都営地下鉄・大江戸線・浅草線・三田線・新宿線の各駅、全国の大学102カ所に配置されています。

スポーツゴジラ®

2026年1月6日発行
第1巻第69号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・阿部雄輔・首藤正徳
波多野圭吾・西本祥子・山内亮治

鈴木希人・四家秀治

制作 株式会社 プライム・オリジンズ

印刷・製本 株式会社 美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401